

2020 → 2021

Artpoint Reports

東京アートポイント計画

—
TERATOTERA

—
小金井アートフル・アクション!

—
アートアクセスあだち
音まち千住の縁

—
500年のcommonを
考えるプロジェクト「YATO」

—
HAPPY TURN / 神津島

—
Artist Collective Fuchu [ACF]

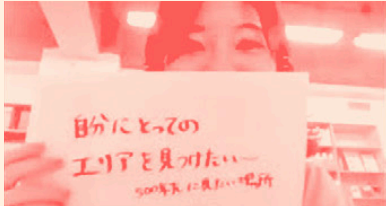
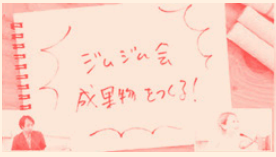
—
ファンタジア! ファンタジア!
—生き方がかたちになったまち—

—
東京で(国)境をこえる

—
移動する中心 | GAYA

Tokyo Art Research Lab

—
Art Support Tohoku-Tokyo



Artpoint Reports 2020 → 2021

はじめに

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを行う文化事業です。2009年にスタートして、今年で12年目。わたしたちが目指しているのは、日常や地域に芸術文化が根つき、東京というまちが創造的な場所になっていくこと。そのために、アートプロジェクトを担う人材育成や活動基盤の整備なども行っています。

『Artpoint Reports 2020→2021』は、一年を振り返りながら、ちょっと先の未来について考えるレポートです。

もくじ

02 About

- 02 東京アートポイント計画とは
- 04 メンバー紹介

05 Project reports

事業報告2020

06 News

2020の取り組み

10 Voices

2020→2021について語る

- 10 役割を問い直した中間支援の働き
- 12 「何でもない場所」をひらく可能性
- 14 異なる他者と出会うためのレッスン
- 17 地域に合った組織のかたち
- 20 悩みを楽しみに変える「互助会」
- 22 「支援」から「協働」へ

25 Annual costs

事業予算

26 Projects

事業一覧



About 東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、NPO^{*1}と東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の3者による「共催」事業です。

特徴は、プロジェクトの立ち上げから複数年かけて、持続可能な活動を行うためにサポートすること。プログラムオフィサーが、情報やスキルを提供しながら現場に伴走することです。

また、アートプロジェクトの担い手を育てるスクールや、新たなスキルやシステムを研究・開発する『Tokyo Art Research Lab (TARL)』と、東日本大震災の被災地支援事業『Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT)』と連携し、互いの知見をもち寄りながら、変化し続けています。

日々の営みに寄り添い、まち・人・活動をつなぐアートプロジェクトとして、「アートポイント」^{*2}を通じて、社会のなかに豊かな文化的生態系を育む取り組みです。

^{*1} 特定非営利活動（NPO）法人のほか、一般社団法人など非営利型の組織も含まれます。共催相手には、市区町村などの基礎自治体、大学等が入る場合もあります。

^{*2} アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。場所だけでなく、アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、参加者も含めて「アートポイント」をつくっていると捉えています。

▶ 共催団体数 | 50団体 (2009～2020年度)

- NPO : 42
- 基礎自治体 : 6 (豊島区 / 荒川区 / 練馬区 / 足立区 / 小金井市 / 三宅村)
- 大学 : 1 (東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科)
- 財団 : 1 (公益財団法人せたがや文化財団 生活工房)

▶ 共催事業数 | 40事業 (2009～2020年度)

*年間約100件のプログラムを実施

▶ Tokyo Art Research Lab受講生数 | 1,030名 (2021年2月現在)



『これからの文化を「10年単位」で語るために —東京アートポイント計画2009-2018—』(2019年)

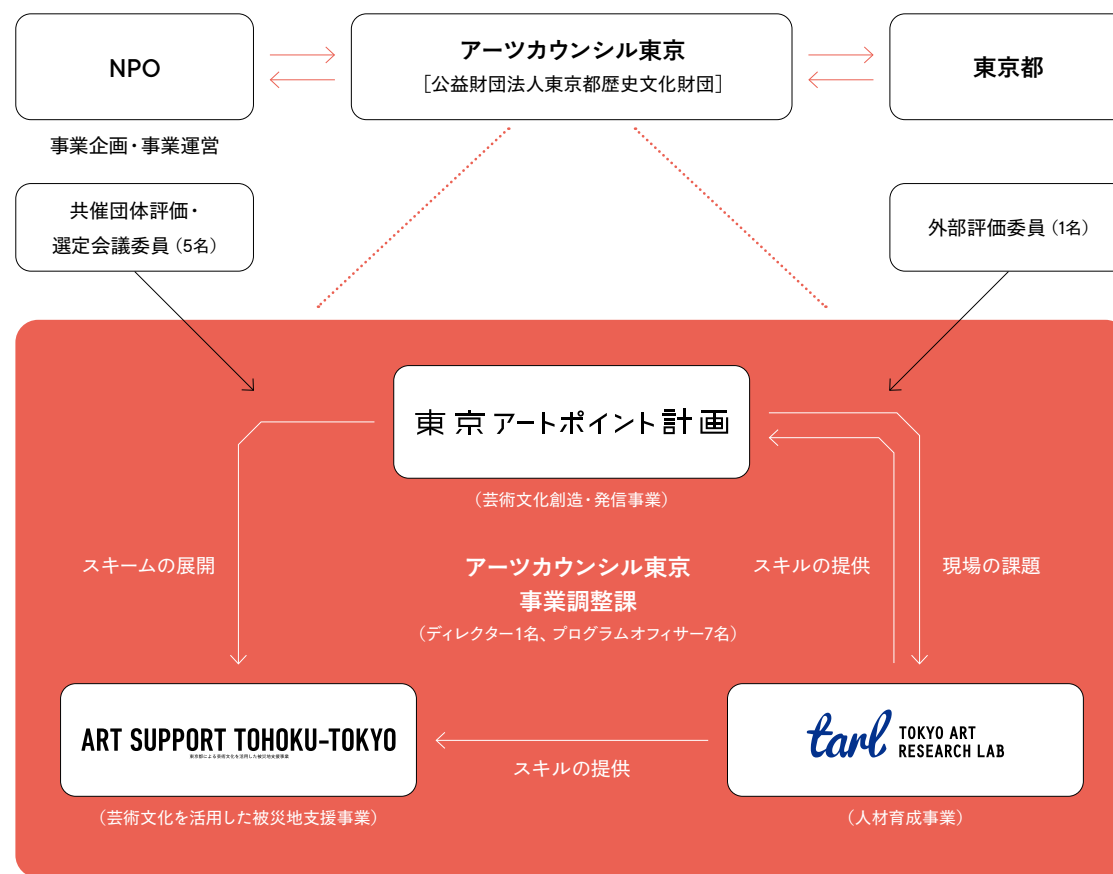
中間支援の9の条件、これまでの歩み、プロジェクトインタビューやドキュメント一覧など、10年間の試行錯誤を収録。現在、書店等にて販売中。下記にてPDFも公開しています。

https://tarl.jp/library/output/2018/artpoint_2009-2018

[組織・人員体制]

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の事業調整課が担当しています。プログラムオフィサーは、「政策」を担当する東京都と「事業」をともに動かすNPOとの間に立つアートマネジメントの専門職です。都の文化政策の目的や課題を

み解き、事業の方向性を模索すること。NPOとの対話を重ねながら社会に向き合い、次の一手を仕掛けていくこと。こうした文化政策と事業の二つの視点を行き来することで、文化事業としての社会的意義を高めています。



▶ 共催団体評価・選定会議委員

- 太下義之 (2015～) 文化政策研究者
- 小山田 徹 (2015～) アーティスト / 京都市立芸術大学美術学部美術研究科 教授
- 西村佳哲 (2015～) プランニング・ディレクター / リビングワールド 代表
- 荻原康子 (2015～) 「隅田川 森羅万象 墨に夢」統括ディレクター
- 竹久 侑 (2015～) 水戸芸術館 現代美術センター 主任学芸員

▶ 外部評価委員

- 芹沢高志 (2011～) P3 art and environment 統括ディレクター



メンバー紹介

ディレクター

1 森司 (2009～) Tsukasa MORI

1960年愛知県生まれ。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、現職。Tokyo Art Research Lab、Art Support Tohoku-Tokyo、リーディングプロジェクト「TURN」「東京キャラバン」のディレクター。2020年よりクリエイティブ・ウェル・プロジェクト(CWP)のディレクターも務める。「酸っぱくて辛いポークビンダルーにハマっています」

プログラムオフィサー

2 大内伸輔 (2009～) Shinsuke OUCHI

1980年茨城県生まれ。取手アートプロジェクトのTAP塾出身。前職は東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手。現在は全体統括を担当。共著に『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画2009-2018—』(アーツカウンシル東京、2019年)。「最近はやぎを育てるプロジェクトに参加中」

3 佐藤李青 (2011～) Risei SATO

1982年宮城県塩竈市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局長を経て、現職。『小金井アートフル・アクション!』『Artist Collective Fuchu [ACF]』『移動する中心|GAYA』のほか、Tokyo Art Research Lab、Art Support Tohoku-Tokyoを担当。「2020年はnoteで日記を公開しました」

4 嘉原 妙 (2015～) Tae YOSHIHARA

1985年兵庫県生まれ。前職はNPO法人BEPPO PROJECT。現在『TERATOTERA』『500年のcommonを考えるプロジェク

ト「YATO」のほかTokyo Art Research Lab、Art Support Tohoku-Tokyoを担当。「週末は美味しい朝ごはんを目指して走っています」

5 上地里佳 (2016～) Rika UECHI

1988年沖縄県宮古島市生まれ。『三宅島大学』、アートNPOヒミングでのアートマネージャーを経て現職。『小金井アートフル・アクション!』『移動する中心|GAYA』、Tokyo Art Research Labを担当。「さまざまな分野との出会い方やかわり方を模索中」

6 岡野恵未子 (2018～) Emiko OKANO

1992年茨城県生まれ。前職は茨城県北芸術祭実行委員会事務局。『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』を担当。「最近うれしかったのは、参加者の大学生に“(プロジェクトの募集メッセージに)ハグされた気がした”とってもらえたこと」

7 村上愛佳 (2019～) Manaka MURAKAMI

1993年東京都生まれ。宮城県育ち。東京藝術大学在学中に「自由な女神」プロジェクトをはじめ。2019年より『TERATOTERA』『Artist Collective Fuchu [ACF]』『東京で(国)境をこえる』を担当。「最近はいまさらですが、マスクの染色をやっています」

8 雨貝未来 (2020～) Miki AMAGAI

1986年茨城県生まれ。一般企業勤務を経て、2013年より取手アートプロジェクト事務局にて郊外都市を舞台にしたアートプロジェクトの運営に携わる。2019年より『HAPPY TURN/神津島』にかかわり、現職でも担当。「実家のブルーベリー畑の手入れに追われる一年でした」

Project reports

事業報告2020

2020年は、経験したことのないパンデミックに直面し、大きく社会が変容しました。日常に寄り添いながらアートプロジェクトを行う東京アートポイント計画は、社会や日々の変容に対して応答し続けた一年でした。

中止か、延期か、オンラインシフトか。いまやるべきことは何か。プロジェクトの運営スタッフとプログラムオフィサーがともに悩み、考え、最も対話を重ねた一年だったと言えるでしょう。大小の困難がありながらも、それぞれの対話と決断の先に新たな技術を開発し、ビジョンを整理し、これまでの活動を振り返る時間でした。

そのなかで大切にしたのは「アートポイントを形成する三つの柱」です。三つの柱とは、人が集い、交流するための「拠点」、情報を届けるための「メディア」、仲間づくりのための「ネットワーク」のことです。事業を整理するとどのプロジェクトにもその要素があり、目的や状況に合わせてそれぞれ独自のものを編み出していました。

わたしたちがこのことに気づいたのは、2019年が終わる頃でした。活動2～3年目のプロジェクトには、それぞれ看板となるプログラムがあります。『HAPPY TURN/神津島』では「くると」という拠点が立ち上がり、『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』では『ファンファンレター』という地域の学級新聞のようなメディアを通じてまちと

かかわり、『500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」』では地域の小学生と「やとっ子同盟」というネットワークをつくっています。一つの柱がかたちになると、それが手がかりとなり次の活動も見えてくる。プロジェクトを育てるために見通しておくべき指標、と言えるかもしれません。

そこで「集えない」という難題に対しても、この考え方を応用しました。映像の収録・配信ができる「拠点」として「STUDIO302」(p.09)をつくり、「メディア」としてプログラムオフィサーが言葉を綴る「note」(p.07)を開始、「ネットワーク」として共催団体が学び合う「ジムジム会」(p.09)をオンラインで実施しました。集えない状況下にあっても、アートプロジェクトは一人ではできません。さまざまな人々の知恵と工夫を持ち寄り、試行錯誤を重ねています。まだまだ先の見えない災禍の渦中ではありますが、人や社会をよく観察し、準備をして、つくり続ける。あらためて確認した、文化に必要な所作を大切にしていきたいと思っています。

カレンダー的な時間は一年で一区切りつきますが、活動はゆるやかに続いていきます。過去を振り返り、ちょっと先の未来を描くために。2020年に取り組んだこと、それらを通して考えていることをそれぞれの担当が語ります。

アートポイントを形成する三つの柱

1

人が集い、交流するための

「拠点」



2

情報を届けるための

「メディア」



3

仲間づくりのための

「ネットワーク」



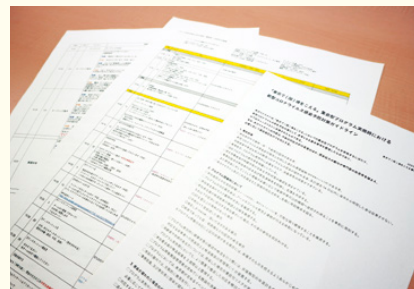
新型コロナウイルス感染症の 対応に奔走しました。

2020年は、夏に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、年明けから大小さまざまな企画が発表されました。そんななか、国内でも新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念されはじめた1月下旬。東京アートポイント計画では、目下2~3月のイベントを実施するかどうかの判断に迫られました。国や自治体のガイドラインなどもまだ定まっていない頃。チームで何度も話し合い、心苦しくも延期や中止の選択をしました。

そして新年度を迎えた4月、一度目の緊急事態宣言が出されました。その間に企画していたイベントはすべて中止に。プログラムオフィサーもリモートワークに切り替えながら、オンラインで共催団体や連携先などと連絡をとりました。仕事は在宅、学校は休校、と活動を担っている人たちそれぞれの生活は大きく変化。共催団体のスタッフのなかには仕事を兼任している人もいます。それぞれの生活的な事情から活動自体が困難な団体もありました。こうした先の見えない状況のなか、プログラムオフィサーはイベント再開を視野に、開催にあたってのガイドラインを作成。また、これまで目前のことに追われてきていなかった、

活動の記録や発信に力を入れていきます。

5月25日に緊急事態宣言が開けてからは、対面の打ち合わせも少しずつ増えていきました。しかし7月31日に全国で感染者数が過去最多となり、第2波が訪れます。国や自治体の明確な要請はないものの、8月に予定していたイベントはすべて中止の判断をしました。それから感染者数が減少傾向になったのを受けた11月、都内の文化施設の例に倣い、小金井市と墨田区で企画していた二つの展覧会を開催。その後、冬の第3波が訪れ、再び緊急事態宣言の発出へ。感染拡大の状況に応じて、その都度、適切な判断や新たな試みに取り組んだ一年でした。▶ p.10



新たに作成した新型コロナ対策ガイドライン等

感覚をひらくコミュニケーションを 模索しています。

執筆 佐藤恵美

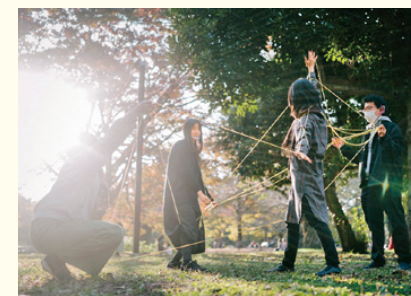
「東京で何かをつくるとしたら」という問いのもと、チームを募り、リサーチや実験を繰り返す「東京プロジェクトスタディ」。この取り組みは、成果ではなく「何かをつくる手前の時間」を大切にしています。2020年は3チームが立ち上がり、うち二つはコミュニケーションの原点に立ち返るものでした。いずれも背景の異なる他者と出会うときの、関係性を考えるスタディです。

一つは「共存する身体と思考を巡って」。写真家の加藤甫、ろう者でダンサー／アーティストの南雲麻衣、インタープリター（通訳者）の和田夏実の3名をナビゲーターに、大学生やマッサージ師、演劇をやっている人など7名が活動をともにしました。オンラインと対面での議論、ワークショップなどを通して、コミュニケーションや表現における身体性を模索。手話通訳者にもかかわってもらい、メンバー内にいるろう者や難聴者への情報保障だけでなく、「翻訳する身体」に出会うことでコミュニケーションの在り方の視点を広げていきました。

一方「Cross Way Tokyo」では、海外にルーツをもつ人とコミュニケーションをとろうとするときの戸惑いやハードルとは何かを探り、他者と向き

合うための態度と方法について考え、それぞれがメディアを立ち上げることを試みました。文化人類学的な視点で活動を行っているデザイナーの阿部航太をナビゲーターに、編集者や国際交流事業に携わる人、海外ルーツの人など9名が集合。フィールドワークやゲストを迎えたレクチャーなどを通して、実は身近にある多様な文化に出会っていくための一歩を踏み出しました。

自分とは異なる他者との出会いを通して、個々のなかで自己変容が起こる体験。こうした活動で得た身体性や思考を、これから「表現」につなげていきたいと考えています。▶ p.14



「共存する身体と思考を巡って」のワークショップ風景
(撮影 | 加藤 甫)

神津島の人口は約1,900人、飛行機に乗れば45分で到着する「東京の島」。『HAPPY TURN／神津島』はU/Iターンをした4名のスタッフが運営を担い、島の入り口として「幸せなターン」のかたちを日々模索しています。

2020年10月にはじめて「島の庭びらきプロジェクト」は、空き家の庭で草刈りとピクニックをするというもの。ただそれだけなのに、さまざまなことが起こりました。

当日、リヤカーにスピーカーと草刈り用具やゴミ袋を積み、「庭びらき中」と書かれたのぼりを立てて拠点を出発。空き家に着くと、キャッチボールなどの即興の儀式を執り行います。ようやく草刈りがスタートすると、親子や近所の小・中学生、商店のおじさんが合流してきます。商店のおじさんは、参加した若者に道具の使い方を教えてくれたり、こどもたちは草の根を流行りのアニメの敵に見立てて退治したり、途中からは噂をききつけた観光客も参加しました。草刈り後のピ

クニックでは「ここでキャンプをしたい」「秘密基地をつくりたい」などの声。帰り道では音楽を流しながらリヤカーを引き、島のなかをパレード。すれ違う人にあいさつをしながらそれぞれ帰路につきました。

実感したのは「何でもない場所」をひらくことの大切さ。明確な使い方を決めずに、そこに集まる人たちのやってみようということができる場。家でも公園でもない、セミパブリックな空間の可能性を感じました。▶ p.12



「島の庭びらきプロジェクト」の様子

空き家の庭で「庭びらき」を はじめました！

執筆 木村和博

アートプロジェクトの在り方を考え、現場で「いま」起きている試行錯誤を残し、伝えるためにnoteでの情報発信をはじめました。非常時にアートや文化は何ができるのか。物理的に集まらずに交流することは可能か。社会の変化に対してどのように対応していけるのか。こうした問いを起点に、現在は七つのカテゴリで記事を掲載しています。

それぞれの現場の出来事や思考を綴る「アートプロジェクトの現場から」、森司による「ディレクター日記」、共催団体がともに学び合う勉強会の記録「ジムジム会（事務局による事務局のためのジムのような勉強会）」、スタジオの開設プロセスを届ける「配信拠点『STUDIO302』をつくる」、コロナ禍のさまざまな文化的な試みを紹介する「集えない」時代のアート・アクション」などです。

7名のプログラムオフィサー（以下、PO）とディレクターを中心に、共催団体やアーティスト、サポーターとともに試行錯誤を重ねた過程を公開しました。これまでも公式ウェブサイト上のブログやメールニュース、Facebookなどでも発信をしてきましたが、noteは現場でPO個人が感じたささや

かな気づきが、よりライブ感をもって記されています。例えば、佐藤李青は一度目の緊急事態宣言後から日記をスタート。岡野恵未子は「ことばの足音を追いかける」というシリーズで、アートプロジェクトの現場で出会った言葉を紐解いています。嘉原妙は、モデレーターを務めるレクチャー「手話と出会う」のレポートを、自身の視点を入れながら綴りました。

中間支援の一つとして、各プロジェクトのさらなる展開や基盤構築に活かせるnoteの使い方を、今後も模索していきます。



2020年5月から開始した「note」
<https://note.tokyoartpoint.jp>

アートプロジェクトの現場を語る 「note」スタート！

執筆 佐藤恵美

プロジェクトの事務局として、共通した悩みや気づきが多く、互いに共感や肯定感を生むような場となりました。プログラムオフィサーが主催する「ジムジム会」は9月で終わりましたが、惜しむ声が多く、参加者が自主的に行う「続・ジムジム会」「ゆるジムジム」が生まれました。

さらにTokyo Art Research Lab (TARL)では、「ジムジム会」の経験をもとに、新たに「つどつど会」もスタート。北は秋田から南は大分まで、各地のアートプロジェクトの現場で働くTARL卒業生による、学び合いの場をつくっています。

▶ p.20



「ジムジム会」で目標を発表している様子

企画、経理、広報、各所との調整や交渉、スタッフのケアなど多岐にわたる業務を担うアートプロジェクトの事務局。そうした事務局のスキルアップとネットワークづくりを目的に、2019年にはじまったのが「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」、通称「ジムジム会」です。

2020年は東京アートポイント計画で共催している9団体を対象に、当初は対面のレクチャー形式での実施を考えていましたが、コロナ禍で方針を変更。5月から9月までの5か月間、月に一度オンラインで集まり、事例発表やディスカッションなどで互いに話す時間を多くとりました。日々の活動を報告したり、情報交換をしたり、一つのテーマについて少人数に分かれて議論したり。オンラインで参加しやすかったこともあり、参加者は前年度の約2倍。運営側は、リアルタイム議事録、ラジオ形式や人形劇での進行など、あらゆる方法を試してはそれらをnoteでも発信。オンラインで集い、交流する実験の場にもなりました。

集えないなかでの「集い方」を実験したジムジム会は、孤軍奮闘になりがちな事務局にとって、相談できる仲間が増える機会に。アートプロ

集えないなかで「集い方」の実験をしました！

執筆 佐藤恵美

成という従来型のスキームから、広域に点在する個々の小さな活動を支援し、有機的にネットワーク化するような、一種の「ハブ」となるNPOとの連携を目指します。

具体的には、小金井以外の地域でも活動してきた『小金井アートフル・アクション!』の蓄積を活かし、多摩全域の10か所で事業を展開予定。それぞれのエリアで活動する個人や組織とのネットワークづくりを行います。いわば、東京アートポイント計画の多摩版ともいえるこのハブを通して、多摩地域の新たな可能性が見えてくると考えています。▶ p.17



「小金井と私 秘かな表現 想起の遠足」の様子 (2018年)

東京23区の西部に広がる多摩地域は、都の人口の3分の1にあたる400万人超を擁し、面積もその半分を占める、都道府県レベルの規模をもつエリアです。自然が豊かに残り、大学や研究開発型の企業も数多く存在する、住みやすく文化的な地域である一方、都知事選などでたびたび耳にする「多摩格差」という言葉にも表れているように、23区と比較した各種インフラの整備の遅れや、人口減少、少子高齢化といった課題にもぶつかってきました。

東京アートポイント計画では、活動開始初期から『TERATOTERA』(JR高円寺駅~国分寺駅エリア)や『小金井アートフル・アクション!』(小金井市ほか)といった、このエリアを舞台とする共催事業を展開。そしてリサーチを重ね、2021年から多摩広域で新たな事業を行う予定です。

これまでの活動やリサーチを通じ、プログラムオフィサーの佐藤李青は「多摩には23区とは異なる特色があることが見えてきた」と話します。そのひとつは、個人で表現活動をする人やそのつながり、生業と結びついた小さなコミュニティが多く存在すること。こうした特性に応じるために、一つの地域を軸に事業を展開するNPOの育

多摩地域で新たな事業を準備中です。

執筆 杉原環樹

収録・配信ができる「STUDIO302」完成！

2020年7月、コロナ禍において「集わずに集う」新たな拠点として、映像の収録・配信ができる「STUDIO302」を開設しました。これまでイベント会場としての利用や、全国各地のアートプロジェクトのアーカイブ資料の収集・公開を行ってきた「ROOM302」(3331 Arts Chiyoda内)の一角をリニューアルした空間です。オンライン会議システムと連携しやすい機材、少人数体制でも配信可能なシステムを構築し、初心者でも高品質な映像収録・配信を行うことができます。

時代や使う人に合わせて柔軟に変化できる「STUDIO302」。これからUDトーク(パソコンや携帯電話を使って、主に聴覚障害者とのコミュニケーションを行うソフトウェア)を利用して文字起こしをしたり、手話通訳者に入ってもらったりするなど、多言語対応の配信も目指します。ここからアートプロジェクトの新たなかたちを開発していきたいと思っています。▶ p.22



「STUDIO302」の様子 (撮影 | 加藤 甫)

機材導入から空間設計・施工を手がけたのは、これまでも拠点づくりのリノベーションをともにしてきた「岩沢兄弟」。兄は空間デザイナー、弟は映像・音響ディレクターという心強いユニットです。お二人は「どどん触って、どどん設定を変えられること」と「簡単に使えること」が両立するバランスを軸に設計したと言います。それが表れているのが素材です。工事現場で使われるようなベニヤ合板やパイプを使ったことで、バラバラで拡張可能な「仮設的」な空間が誕生しました。

施工現場に立ち会ったディレクターの森司は「その場で調整しながらつくり上げる様子は、イ

「10年単位」の取り組み、続けていきます。

執筆 佐藤恵美

「移民」をめぐるデータや今後の方策などを収録しながら、代表の海老原原子がこれまでの活動を振り返ります。ASTTでは、東日本大震災の経験を未来につなげるウェブサイト『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』を立ち上げ、一般公募を行った「10年目の手記」、震災とコロナ禍をつなぐ「2020年リレー日記」などを連載してきました。

どの活動にも「何をしてきたか」だけでなく、10年単位で「何が見えたか」「どのような変化が起こったか」「何を残していきたいか」が記されています。



校正中のドキュメントや東見本の様子

東京アートポイント計画では、スタートから10年という区切りに『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画2009-2018—』と題した書籍を出版しました。このタイトルにあるように10年を一つの単位として捉え、時間をかけて文化事業に取り組むことを大切にしています。

今年度、これまで共催した団体や事業も発足から10年を迎えました。一緒に走り続けてきた『TERATOTERA』『小金井アートフル・アクション!』『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』、Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT)、共催期間は数年ですが団体が発足して10年経った一般社団法人谷中のおかって、一般社団法人kuriya。これら6事業や団体がそれぞれ書籍や特設ウェブサイト制作、10年分の知見や技術などを独自の方法でまとめています。

例えば、TERATOTERAは「テラッコ」と呼ばれるボランティアスタッフが主体的に事業にかかわっており、ドキュメント制作もかれらを中心に行いました。一般社団法人kuriyaは『外国ルーツの若者たちと歩んだ10年』と題し、国内の

役割を問い直した 中間支援の働き



大内伸輔
Shinsuke OUCHI



佐藤李青
Risei SATO

新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われた2020年。
プログラムオフィサーとして、どのように対応したのかを語ります。

小さくても日常的なトライアルを

—— このコロナ禍の一年はどうでしたか？

大内 東京アートポイント計画のミッションの一つである、それぞれの地域で集える場所をつくるのが難しい一年でした。「これをしたらこれができる」という絶対的な対策はありません。それはどの段階も同じで。いまできること、できないことは何か。大小さまざまな選択をその都度見極め、何度も見直しました。変更の連続でしたが、それでもどうにか全体的な計画の軸は変えずにやってこられたと思います。

佐藤 東京アートポイント計画は、大きなイベントをどーんとやるよりは、それぞれの地域で小さな活動を日常的に行っていく事業です。これまでそのときどきの課題に対し、議論したり体制を立て直したりしてきたので、今回も大きな変更や緊急対応に動くことは少なかったと思います。

中止せざるを得ないプログラムも多く、時間が

できた分、これまでできなかった情報発信に力を入れました。各団体が動画配信を試みたり、わたしたちプログラムオフィサーもnoteをはじめたり (p.07)。こういうときだからこそ、オンラインを通じて伝えていくことに注力しました。

—— 共催団体とのやりとりは変化しましたか？

大内 特に、春頃は誰もが絶望しがちな状況でしたよね。ただ、事業を続ける上では直接的に何かを失ったわけではありません。これまでと同じように、小さくても日常的なトライアルを続けていくことが文化になっていく。そうした心持ちで各団体と話していました。

佐藤 オンラインミーティングが増えた最初の頃は、議論を広げるために、いかに無駄な話をするかを意識していました。でも、オンラインで長話をするのは疲れてしまう。Zoom以外にも、リモートワークが増えたことでSlackやFacebookメッセンジャーなどさまざまなツールを試しました。細々としたやりとりはそうしたツールで事前に済ませておくと、ミーティングでは、その場で

出てくる話に集中できるのでスムーズだと感じています。

オンラインでできること、できないこと

—— オンライン化が進んで良かったことや課題があれば、教えてください。

佐藤 中間支援として担ってきた役割のすべてを、オンラインでできるのかという悩みが出てきましたね。オンラインは、決めた枠組みの物事を前に進める議論には向いていると思います。ただ、目的をより明確にしたり、前提を問い直したりといった、わたしたちが普段行っている話には不向きかもしれない、と。異なる人と何かを一緒にやるためには、そもそもの話をしたり、相手との温度調整をしたりと、関係性を変えることが必要になるタイミングがあるんです。

大内 でも「そもそもこれは何のためにやろうとしているんでしたっけ？」と根本を問うときに、画面上だと言うタイミングを掴みにくいんですね。

佐藤 NPOや自治体、アーティストなど、さまざまな立場の人がいる対面の打ち合わせでは、会の前後や休憩時間などを使い、話す相手を見ながら個別に確認や相談を行っていました。意識せずにやっていたけれど、実はそれが中間支援の役割として重要だったのかもしれない。オンラインでもそれに代わることができるのですが、模索中です。

大内 オンラインという入り口が増えたことで、さまざまな人に届く可能性が広がりました。Tokyo Art Research Labでも「通うのが難しくてこれまで参加できなかった」という方の参加も増えました。海外で暮らす人との距離も縮まりましたよね。

状況は大きく変わりましたが、それに応じて新たな方法を開発した現場や、創造的なシーンも

多くあったように思います。例えば、『HAPPY TURN／神津島』では、島外に住んでいる人から島に向けてビデオレターを届ける企画が生まれました。島の内外をつなぐというプロジェクトのコンセプトに立ち返ることもできましたし、コロナが落ち着いても続けられる、良い取り組みが生まれたと思います。

これから準備しておくこと

—— 今後プログラムオフィサーとして、どのような役割が求められていくと思いますか？

佐藤 打ち合わせや事業の企画、運営でも、今後はオンラインとオフラインを「選択」し、両者のハイブリッドな方法や基盤づくりが求められていくのではないのでしょうか。

大内 ガイドラインを守りながら直接集ったり、オンライン配信を行って集ったりとさまざまな方法を模索してきましたが、今後はさまざまなチャンネルを準備しておくことがより重要になるでしょうね。

以前のように、直接会って集うことのよさは何ものにも変え難い。でも「あのときよりいいよね」という方法はいずれきっと見つけていくのだと思います。これまで実験や開発を繰り返してきたように。



チーム内のオンラインミーティングの様子

「何でもない場所」を ひらく可能性



雨貝 未来
Miki AMAGAI

島への入り口として「幸せなターン」のかたちを模索する『HAPPY TURN／神津島』。「島の庭びらき」の経験から、「何でもない場所」の可能性や試行錯誤を語りました。

「ための時間」をもつ

—— 2020年を振り返って、印象に残っていることを教えてください。

今年はコロナ禍で、事務局とは基本的にオンラインのやりとり。実際にわたしが神津島に行けたのは11月に入ってからでした。約半年ぶりに訪れると、拠点が「かれらのもの」になっていたんです。好き勝手に使っているという意味ではありません。そこに事務局メンバーも、訪れる人の顔ぶれもほぼ変わらないのに前よりずっと人の温度が感じられ、空間が使われている感じがあったんです。以前は「何でもない場所」であることへの事務局の戸惑いがあり、使い方を掴みあぐねているように見えたので驚きました。

—— 事務局メンバーは、その戸惑いとどのように向き合っていたのでしょうか？

とにかくふらっと来てくれる人との関係を大切に育てようとしていました。島の人と一緒に庭に芝の種を蒔いたり、竹垣をつくったり、放課後やってくるこ

もたちと遊んだり、通りがかる人にあいさつをしたり。目的がわかりやすいイベントやメンバーが好きなことを闇雲にやろうとしたときもありましたが、そのときは「もう少し待ってみませんか？」と声がけをしました。最初から何かをする場所として名づけたり、事務局メンバーがやりたいことをやってしまうと内輪の場になりやすい。誰が何をしてもいい場であるためにさまざまな人とかかわり続けて、メンバーそれぞれがいいと思うものを一度問い直す「ための時間」が必要だと感じたんです。答えや理由をせつかに求めず、不確かさやわからなさのなかにいられる力を育む時間だったと言い換えてもいいかもしれません。

島の人たちには「公民館とは違うの?」「店でもやればいいのに」とよく言われました(笑)。それに対しては、答えを渡さず「どんな場所にしたらいいんでしょうねえ」「何をやってみたらいいと思います?」と一緒に悩みましたね。

事務局メンバーは、その状態に対してすぐに自信をもつのは難しいようでした。なのでいまの期間も大切に価値があるということ、その都度伝えていましたね。週1回、朝礼をオンラインでつないでいるの



「島の庭びらきプロジェクト」で空き家に向かう様子



「島の庭びらきプロジェクト」のピクニックの様子

で、日々具体的に拠点で起こっていることに触れながら、目的や使い方が決まっていなかったからこそ起きる出来事の価値を伝えたり、ときには拠点でやる企画を提案したり。11月に訪れたときは、それらを経て、自分たちがやりたいこととひらかれた場としてのバランス感覚を獲得していると感じました。

30年後の種を蒔く

—— 空き家の庭の草刈りとピクニックをする「島の庭びらき」をやってみて、どのような気づきがありましたか？

まだはじまったばかりですが、『HAPPY TURN／神津島』は、30年スパンのプロジェクトかもしれないと気づきました。事務局メンバーは全員30代前後、Uターン者です。かれらがプロジェクトで主に接している子どもたちは8歳くらい。その子どもたちの多くは進学や就職のために10代後半で島を出ます。そして事務局メンバーと同じくらいの年になったとき、ここでの経験を思い出して、島に何か還元したいという思いが生まれてくることもあるのではないかなと。

神津島には島ならではの風習があるんです。例えば、天然痘が流行ったときに生まれた無病息災を願う「ほうそう神様」のお詣りや、日中仕事禁止で、

日が暮れたら家から出てはいけない「二十五日様」など。昨年から少しずつ先輩方に話をきき、実際にいくつかの風習をやってみているところです。こうした経験や、庭びらきで「何でもない場所」をどう使うか一緒に考えたこと。それらが結果的に30年後の種を蒔くことになると思っています。

子どもたちは、あくまで事務局メンバーに会いに来るんです。そしてその子どもたちがいられる場所として拠点がある。場所があるから人が集まるのではなく、「人」がいるから拠点になっていくんですね。だからこそ、「いろいろな人の手の跡が残る場所」として、これからもひらかれた存在であってほしいと思っています。事務局が丁寧に育てている「何でもない場所」から30年後の神津島にどのような風景が生まれるのか。想像するとわくわくするんです。



拠点「くると」の夕方の風景

異なる他者と 出会うためのレッスン



嘉原 妙
Tae YOSHIHARA



上地 里佳
Rika UECHI

他者との出会い方を模索した二つの「東京プロジェクトスタディ」。
それぞれのスタディで過ごした半年間について語ります。

悩む時間の大切さ

——「東京プロジェクトスタディ」はどのようなプログラムですか？

嘉原 Tokyo Art Research Lab (TARL) の一環の「何かをつくる手前の時間」を重視したプログラムで、今年で3年目になります。ナビゲーターを迎え、メンバーを募集して進めるのですが、最終的に何かをつくれなくても大丈夫。成果ではなくかたちになる前の、逡巡したり悩んだりする時間を大切にしています。

上地 何かをつくるためには悩む時間が大事だなとしみじみと感じています。何のためにやっているのかという自身の目的を問い直すことにもなるし、チームで共有してフィードバックする、その繰り返しは思考を鍛錬する時間でもあります。

——嘉原さんの担当する「共在する身体と思考を巡って」、上地さんの「Cross Way Tokyo」は、それぞれどのような経緯でスタートしたのでしょうか？

嘉原 企画を詰めていた2020年の春頃はオンラインミーティングが推奨され、Zoomに慣れはじめた時期でした。でも、オンラインだと目が合わないし、人の気配が消されてしまう。これまで誰かと何かをつくる時、いかに非言語のコミュニケーションが支えになっていたのかを痛感しましたね。そうしたなかで議論を重ね、改めて、他者と向き合うときの身体性について考えてみたい、とスタートしました。

上地 「Cross Way Tokyo」は、文化人類学的な視点からプロジェクトを手がけている、デザイナーの阿部航太さんをナビゲーターに迎えました。立ち上げのときに「違う文化圏の人と話すとき、失礼なことを言うのが怖くて尻込みしてしまうという友人がいて、そのハードルをどう乗り越えられるかを考えたい」と話していたことが起点になっています。

阿部さんは、異なる背景をもつ人々を「自分の知らない世界を教えてくれる先生のような存在」だとも語っています。だからこそ、他者を変えようとするのではなく、自身の意識や態度

を変えていくことで、新たな関係性をつくって
いけるのではないかと。

—— どのようなスタディを重ねていますか？

嘉原 Zoomでお互いの顔を見ず、声も使わず、音声入力や文字で自己紹介をするワークショップからはじめました。視覚情報がないなかの不安や定まらなさによって、普段、他者を見たときに何を知覚しているか考えさせられましたね。それから、歌人の伊藤紺さんをゲストに迎えたワークショップでは、彼女が選んだ歌に対してメンバーが感じたことを共有し、そのあと各自で短歌をつくり、歌を通じたコミュニケーションを試みました。

ゲストやナビゲーターからやり方を教えてもらうのではなく、それぞれの方法論を編み出していく。わたしたちのチームは、最終的にコミュニケーションの新たな仕掛けのようなものをつくり、オープンスタジオを行う予定です。

上地 わたしたちはまず、移民についての個人的なイメージを共有し、そのあとゲストのレクチャーを通して基礎知識やかれらを取り巻く構造を学びました。例えば一般社団法人kuriyaの海老原周子さんには、彼女が取り組んできた外国人高校生とのプロジェクトやそこから見えてきた課題について教えていただきました。海老原さんが「間違いを恐れないこと」という、



「Cross Way Tokyo」の活動風景



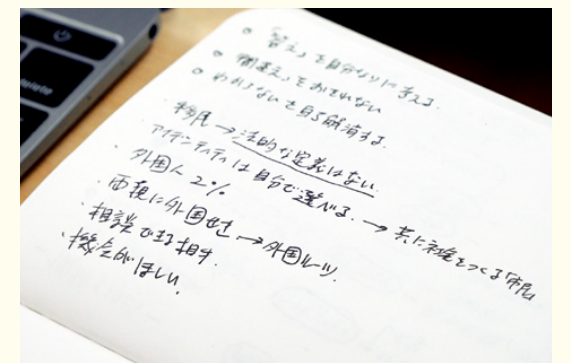
「共在する身体と思考を巡って」にて、2人1組でスポンジを落とさないようにもち、互いの真んなかを探るワークショップを行った（撮影 | 加藤 甫）

萎縮せずに対話する大切さを話されていたのが印象的でした。自分のなかにある矛盾や先入観に気づいたあとに、この言葉をきけてよかったですね。メンバーそれぞれが抱える問いや悩みをさらけ出しながら話し合っています。

結果としてのアクセシビリティ

—— 他者とのように距離を縮めるかだけでなく、他者とかかわる手前の心構え、新たな出会いの方法を模索しているのですね。

嘉原 わたしたちのチームにはろう者がいて、手話通訳者もメンバーとして伴走していました。例えば、オンラインの画面で手話を見続けるのは2時間が限界で、それ以上は疲れてしまう。そ



「Cross Way Tokyo」のレクチャー時のメモ

地域に合った組織のかたち



佐藤李青
Risei SATO



岡野恵未子
Emiko OKANO

2021年にスタート予定の多摩地域を舞台にした共催事業。
東京アートポイント計画が始動して11年の間に培ってきた経験から、
プログラムオフィサーの二人が地域と組織の関係性について語ります。

既にある活動をつなげる、 「ハブ」としてのNPO

—— 多摩地域を舞台にした新しい共催事業には、どのような背景や狙いがあるのでしょうか？

佐藤 もともと事業を行うなかで、23区と多摩では地域の特色や求められるやり方が違うのではないかとこの話が上がっていました。例えば、23区では単独のNPOが力をつけて、その団体を中心に事業を行うための土台づくりをしてきました。けれども、多摩には個人で表現活動や商いをする人、その横のつながりが多く存在していて、新しく強い組織よりも、既にあるネットワークを活性化して、より広域で文化活動に火を点ける仕組みが必要なのではないか、と感じたのです。

また、東京都の政策でも「多摩格差」という言葉が出てくるほど、23区との違いが課題となっていることもあり、この枠組みで新たな試みをしようとなりました。

—— 具体的には、どのようなことを行うのでしょうか？

佐藤 わたしたち東京アートポイント計画のような中間支援を行うNPOをパートナーとして事業を行うイメージです。多摩はもともと市民活動が盛んな地域で、マルシェやサークルなどの生活に根ざした小さなコミュニティが多くある。そこに我々が不用意に入ると、その関係性を壊してしまいかねない。ならば、既存のプレイヤーを新たにつなげたり、連携して事業を行ったりするような、一種の「ハブ」となる組織と組む方法がいいのではないかと。

そこでは、『小金井アートフル・アクション! (以下、小金井)』での経験の蓄積が生かせると考えています。この事業を運営するNPO法人アートフル・アクションには、こどもから高齢者までを対象にした、さまざまな事業のノウハウがある。また、小金井以外でも活動していて、多摩地域内のつながりもある。そういったNPOが中間支援の機能をもつことで、多摩の特性に合わせた活動を展開できるのではないかと考えています。

岡野 わたしが担当する『アートアクセスあだち 音まち千住の縁 (以下、音まち)』もそうですが、長

や、その協働の仕組みを考えてきましたが、わたしたちが手を伸ばしていた範囲はまだまだ狭かったのかもしれない。これまでほんとうに背景の異なる「他者」と出会ってきたのだろうか、と振り返る機会にもなりました。

—— 今後の展望はありますか？

上地 フィールドワークやインタビューでお世話になった相手にどのように還していけるか、協働していけるか、といつも考えています。「Cross Way Tokyo」では最後に何かしらのメディアをつくる予定ですが、そのとき個人々の視点で発信されることで、さまざまな角度からの問いや思考が可視化されていくといいなと思います。

「多文化共生」という大きなテーマで一律に扱うのではなく、スタディで学んだ経験をどのように一人ひとりが日常のなかにもち込んでいくかが、一番大切だと思いますね。

嘉原 先ほど「戻込みしてしまう、そのハードルをどう越えていけるのか」という話がありましたが、やはりさまざまな出会いのなかで、無意識に遠慮してしまうことも多いと思います。ですが「失礼かもしれない」という気持ちを一旦置いて「わからないから教えてほしい」と気軽に言い合える関係、対話しやすい場をつくっていくのが大事なのだと思うようになりました。

初めから「情報保障」や「アクセシビリティ」を用意する視点も必要です。けれど、まずは互いの「わからないこと」を共有し合うところからはじめたい。そのトライアンドエラーを積み重ね、最後に振り返ったとき「はじめる前に比べると、お互いに情報保障された環境が生まれたね」という結果につながることで、文化的な営みだと思うのです。そうやって、今後もアートプロジェクトにおけるアクセシビリティの在り方を考えていきたいです。



TARLの手話講座の様子 (撮影 | 齋藤彰英)

んなときは、じゃあ、このあとはチャットで話すのはどうかなどさまざまな試行錯誤を重ねました。事前準備や情報共有の方法、手話通訳者の予算や打ち合わせの適正時間など環境設計にまつわる気づきも多く、アートマネジメントの更新が必要だと感じましたね。

上地 お互いに知ることで得た気づきという点では、TARLで行った手話講座も大きな経験で、発話と手話による文化の違いを知りました。例えば「多摩川」は、指文字だけでは地名なのか川なのか判別しにくいですね。そこにジェスチャーで川の流れを表すことで、川だということがわかる。手話や指文字を完璧にできることではなく、知りたい、伝えたいという姿勢をもつことが大事なのだと実感した時間でした。

嘉原 手話って、ほんとうに表情が豊かなんですが、それはつまり「顔には文法がある」ということ。手話講座では、日常生活のなかで何気なく使っていた伝え方や物事の捉え方を改めて自覚したり、ろう者の捉え方を知ることで視点がひっくり返されるような経験がたくさんありましたね。

アートプロジェクトは、さまざまな価値観や背景をもつ人々と協働することで生まれる表現

い間活動していると、地域や市民メンバーから「こんなことに困っている」「こういうことがしたい」など相談や提案がくることがあります。実際、そうした相談をきっかけにスピノフ企画が生まれ、コロナ禍でも市民メンバーの活動が活発に行われたりしていました。ただ、自分たちで事業をしながら相談まで受けるのは難しいし、拾いきれないものもある。そうした意味で、中間支援に特化した組織ができるのは面白いと思います。

佐藤 実は、広域の中間支援をするNPOをパートナーとした事業のやり方は、東日本大震災の被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）の経験から学んだことも大きいんです。そこで見えたのは、広域の活動によっていままですぐ近くにいたけれど話したことの無い人同士が同じテーブルにつき、情報交換をすることで、その刺激をそれぞれの地域にもち帰って活動に生かすということ。こうしたことが、多摩でもできるのではないかと考えています。

培った知恵や技術を、「実践」に変えていく

—— お二人が担当してきた小金井と音まちでは、参加者との関係性も異なりますか？

岡野 音まちは、「無縁社会」というキーワードが社会的に話題となっていた立ち上げ当初から、人と人、人と場所などをつなげることを目指しています。これまでタイプの異なるアーティストたちが地域に入り、市民参加型の企画を仕掛けてきました。テーマによってさまざまな層からの参加があるのですが、誰もが自分ごととしてかかわれる場をつくらうとしてきました。そうした場があることで、新しい「縁」が生まれるのではないかと。

実際、プロジェクトを支える市民チームが生まれているものも多く、自分たちで「お祭り」をつくるように、自覚的にかかわる人が多いですね。

佐藤 一方、小金井はより表現が生活に溶け込んでいて、活動で得た経験を生活に還していく人が多い気がします。一度、各事業のボランティア数を調べたときに、小金井は数が明確に出なかったんです。代わりに「折に触れて手伝う人」と言えるような層がいて、過去に事業にかかわって、展示の際などにふと手を貸してくれる人が周りに結構いることがわかった。それは事業の成果としては見えにくいけれど、時間をかけて多様な人たちとのかかわりが生まれているわけです。

その意味では、音まちでは市民が自分の祭りとして事業にかかわる、小金井では気がついたら事業にかかわってそこで何かを得ているという風に、地域性などの違いで求められるかたちが異なると思います。それは、東京アートポイント計画を11年やったからこそ見えてきたもの。ただ、ここ数年、両者に共通して出てきた問いが「誰に出会えていないのか」ということです。

岡野 すでに出会っている層の人たちの外側にどのように関係を広げるか、ということですね。

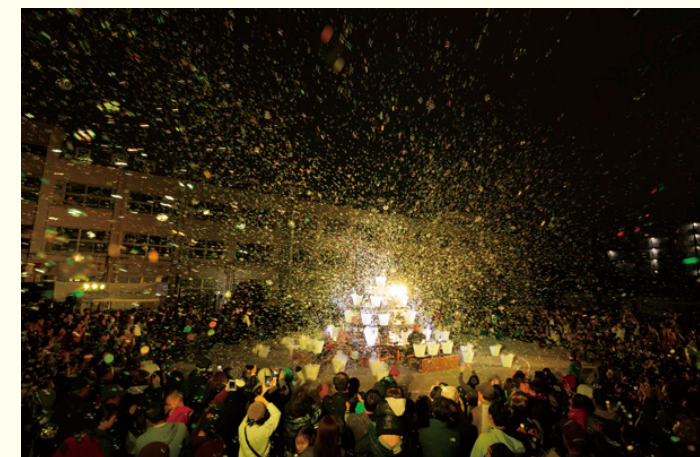
佐藤 最近、ネットワークとプラットフォームの意味の違いに気づいたんですね。前者は関係性を強化するもので、突き詰めると場が閉じてしまう。後者はひらかれた場で、公的事業を行う我々としては、これをつくり、そこを土台につなかりを築きたい。しかし安心して場をひらくには、さらに手前に安心できるネットワークが必要で……それには時間がかかりますね。

特にこの一年のオンライン化で、既にある関係性を土台に事務局と対話する時間が増えました。そこで可視化されたネットワークを、この状況下でどのようにプラットフォームとしてひらくのが課題でした。

岡野 東京アートポイント計画の今後の課題には、中



『小金井アートフル・アクション!』で行った「えいちゃんふえす」。映像制作の初心者たちが作品づくりに挑戦した



『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』で開催した大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住 2018 西新井」の様子（撮影 | 富田了平）

間支援的な組織の存在や役割、必要性に対する認知をより広めることもあります。最近、アーティストの友人が助成金の申請を行っていたのですが、制作も事務も経理も自分でやって苦労していたんですね。本来、そういったサポートは中間支援の役割ですが、そういう存在があることを知らないと専門家に頼るという発想に至らないとあらためて感じました。

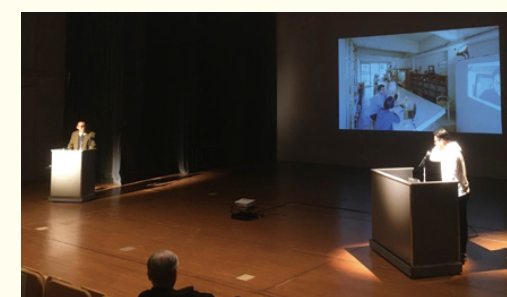
—— 芸術文化と社会の間に立つ存在は、ますます重要になりそうですね。

佐藤 これからは役割分担の時代ではなくなるかもしれません。いまの話であれば、中間支援的なマネジメントの技術はつなぎ手役のマネージャーだけのものではなく、アーティストにも共有することが必要になる。経済的にも人口的にも余裕が失われ、さらにコロナ禍で厳しい状況が続くなか、それぞれが既にもっている知恵や技術を丁寧に伝え、混ぜ合わせる必要があるようになってくると思います。

コロナ禍がはじまった際、我々が長年伝えてきたつもりだったことが、実は社会に全然シェアできていないと思い知りました。東京アートポイント計画は、地域で暮らす人たちの日常に息づくような文化事業に取り組んできた

め、コロナ禍で多くのイベントが閉じていっても、生活は続くように、我々の現場は動き続けていた。それを確認できたことで、これからは自信をもってこれまでの11年を語り直し、わたしたちの視点や技術をシェアしていく必要があると思っています。

これは、先ほどの「新しい人に出会う」という課題にも通じます。オンラインミーティングでは、相手の隣にはその人の家族がいることに気づくことがあります。「出会えていない人」は、実は既に知っている人の隣にもいて、そこからネットワークが広がるかもしれない。そんな風に、これまで培ってきた知恵や技術、人のつながりを、きちんと生活や活動のなかで置き直し、「実践」に変えていく。多摩地域における取り組みでも、そうした視点を大切にしたいと思っています。



事業協力として国立市で行ったセミナーの様子

悩みを楽しみに変える「互助会」



村上愛佳

Manaka MURAKAMI



大内伸輔

Shinsuke OUCHI

今年はオンラインで開催した、共催団体の勉強会「通称：ジムジム会」。
情報交換や悩み相談の場となり、「互助会」としてのネットワークが生まれつつあります。

ジムのような勉強会

——「ジムジム会」について教えてください。

村上 東京アートポイント計画の共催団体を対象にした、「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」で、2019年に立ち上がりました。

大内 それまでも緊急的に行ったリスクマネジメントの勉強会や、年度末の報告会などはあったのですが、より定期的な学び合いとネットワークづくりの場としてスタートしました。

村上 今年は、月に一度5か月間、すべてオンラインで開催。集えない分、ディスカッションなどで互いに話す時間を大事にし、オンラインでの進行方法や議事録の取り方などを実験しました。ジムジム会でトライしたことは、ポイントをまとめてnoteで発信しました (p.07)。

——どのような流れで進行したのでしょうか？

村上 最初に各団体が10分ほど活動報告し、そのあとテーマを決めたディスカッションや拠点紹介などコーナーを立ててラジオ番組のように進

めました。去年は各団体2名ほどの参加でしたが、今年は4、5名参加するチームもあって、初回は40名ほどの参加者数となりました。

大内 去年は、神津島など遠方の事務局はなかなか参加できなかったんです。これまで他団体の拠点に行けなかった人も、拠点紹介のコーナーで現場の空気を感じることができる。オンラインならではのメリットでした。

村上 毎回アンケートを採っていましたが「もう顔出しのオンラインイベントに飽きた」「テレビのような演出は冷めてしまう」など、厳しい意見も結構あって、わたしたち運営側も触発されました。普段はプログラムオフィサーが共催団体にアドバイスすることが多いのですが、いつもと異なる関係が生まれて新鮮でした。そこで人形劇や木琴の演奏といった演出を入れてみるなど工夫を重ねました。

ジムジム会から生まれたこと

——そのほかにどのような反応がありましたか？

村上 共催団体同士の横のつながりが生まれてきて

います。例えば、近いテーマをもつ「イミグレーション・ミュージアム・東京」と『東京で(国)境をこえる』の担当者が仲良くなり、お互いの活動に参加しているようです。

大内 各現場では「この間のジムジム会に出ていたあの話みたいなの……」と「ジムジム会」での議論を参照することが増えました。

村上 よく参照されていたのは『ファンタジア! ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』が制作している広報紙『ファンファンレター』です。ご近所にあいさつに行くきっかけをつくることを目的に、プロフェッショナルなクオリティよりも、ハサミやスタンプを使ってアナログな共同作業ができる方法を編み出したものです。

大内 この取り組みが紹介されたあとにレターブームが起きましたね。「人に届けるものはちゃんとつくらなければ」と考えていたチームも「こんなにカジュアルなものでいいんだ!」と肩の力が抜けたのかもしれません。現場の実践が共有知となり、それぞれのプロジェクトが回転していく。互いに学び助け合う「互助会」のような場になりました。

村上 『ファンファンレター』をつくった大人たちも「こんなに褒められるとは思っていなかった」と喜んでいましたね。



演出に使った人形劇の様子 (撮影 | 加藤 甫)

大内 事務局ってあまり褒められないんですよね。評価が見えにくいし、地域の人や行政、アーティストなどさまざまなステークホルダーに挟まれる立場でもあって。でも自分たちのやっていることに誇りはあるから、褒められるとうれしい。仕事への自信や誇りが醸成される場にもなったのではないのでしょうか。

村上 一番良かったことは、運営が引き継がれたことかもしれません。

大内 「続けたい」という声があって、自発的に「続・ジムジム会」が生まれ、各団体が持ち回りで運営が引き継がれました。「ゆるジムジム」というオンライン飲み会のような場では「アートプロジェクトの原体験って何ですか?」と、核心に迫る話も出たりしています。

——今後、どのような運営を考えていますか？

村上 以前、共催団体と、東京アートポイント計画を卒業した団体にヒアリングに行ったことがあって「いろいろと吸収できた!」と興奮して帰ったことがあります。先輩をジムジム会に招き、活動を共有してもらうのもいいかもしれません。

大内 卒業後はどうなるのだろう、という不安もきっとありますよね。アートマネジメントのスキルを学ぶ取り組みと、ネットワークの強化、今後も両輪でやっていきたいと思っています。



「ジムジム会」で生まれた名言をまとめたカルタ

「支援」から「協働」へ



森 司
Tsukasa MORI

文化事業者にとって2020年はどうのような年だったか。
コロナ禍、そしてコロナ後の社会について語りました。

いま、文化事業者に求められること

—— 2020年は東京オリンピック・パラリンピックが延期され、関連する文化プログラムも中止や変更を余儀なくされました。こうした現状をどのように見えていますか？

芸術文化に携わる身としては、社会的に「待機せよ」と言われた感覚です。「2020年に向けて駆け抜けろ！」と言われたあとの突然の待機指示。実際、深刻さを増す医療現場の状況を見ると、芸術文化にできるふるまいは、むやみには動かないことだと思っています。一方、この間の失業者や自殺者の増加などからは、潜在的なメンタルヘルスの問題に対して文化の役割は増しているように感じます。ただ、いまは動けない。

そうしたなかで、人々はかつてあったささやかな生活文化に対する欠如感をじわじわと感じているのではないのでしょうか。「今日飲みに行こう」とか「カラオケで歌おう」とか、従来は当たり前すぎて価値化されていなかった文化が封じられている。しかも、状況はいまよりさらに悪くなる可能性もある。まったく予断を許さない状況です。

ただ、「待機せよ」は「準備せよ」でもあります。従来は走りながらだったのが、いまは立ち止まって物事を「しっかり見る」ことができる。そこにある微細な変化が遠因となり、数年後に影響を及ぼすかもしれない。そのような予兆を見据えることが、時代の目撃者として大切なことだと思っています。

言い方を変えると、ある変化に社会が順応するまで、文化は入っていけないという感覚があります。特に我々のようなプロジェクト型の事業は、「様式」が急激に変容している最中の社会にはうまくのせられません。だから何にせよ、状況が落ち着くのを準備しながら待つしかないと思って過ごしていました。

—— この間、森さんはたびたび「正しく身を縮める」ことが大事だと話されていましたね。時代に合った小さな活動を見直すべきだ、と。

普段はあまり意識されませんが、文化は生活にすぐく密着しています。例えば、体調が悪いと文化芸術に触れる気にならないように、経済的にも時間的にもある程度余裕がないと文化を享受するマインドにならない。文化は社会を彩るだけではなく、個人的な無意識を示すバロメーター的なものでもあると思います。ならば、いま求められるかたちに合わせ

る必要がありますよね。

僕の周囲では、工夫を凝らして無観客で行われた昨年末の紅白歌合戦がわりと好評でしたが、従来そのまま開催していたら批判の声が上がったでしょう。時代の空気感を読むことが、文化事業を企画する側にこれまで以上に求められていると思います。

「支援」ではなく、「ともに学び合う場」を

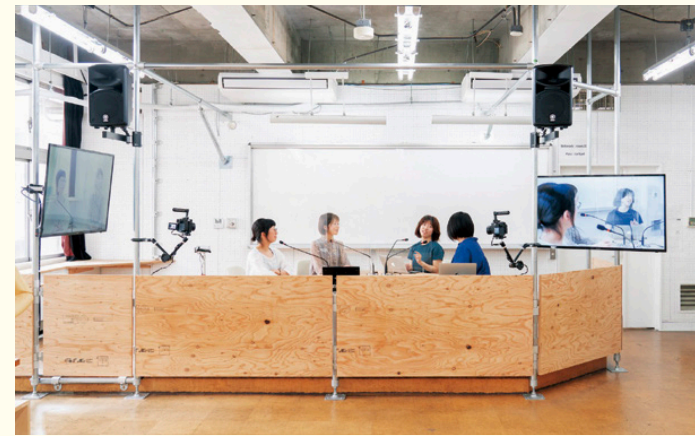
—— 共催団体との関係にも変化はありましたか？

共催団体の事務局と「ジムジム会」という勉強会を行ってきました (p.09)。コロナ禍でその場が「支援」ではなく「ともに学び合う場」に変容したんです。これは、我々にとって大きな価値ある変化と言えるものです。コロナ禍で我々がもつ経験則の優位性がなくなったからでしょう。感染症への対峙の仕方は、我々も現場の事務局も等しくわからない。立場は違うけれど同じ悩みをもつ者同士として、意見を言い合える関係になったんです。

しかもこの関係性は、コロナが落ち着いたら元通りになるのではなく、不可逆のものだと思います。こうした立場の変化はさまざまな面で起きているように思いますね。例えばコロナ禍の美術館では展覧会の開催が難しくなった反面、教育普及の現場は元気でした。これまで手を替え品を替え、人と直接関わってきた仕事の価値が見直された。そうした変化全体をいかに事業設計に取り込められるかが求められていると思います。

—— そのとき、プログラムオフィサー (PO) に必要な姿勢とは？

新たに広く学ぶことだと思います。チーム内で、一緒に仕事をしたい「1000」をリストアップすることを始めました。その対象は何でもいいんです。対象の枠をどこまで広げて考えられるか。いまは、何を情報源とするか、その仕入れ方が変化している状況だと思います。そうしたなかでは自分に引っかか



完成した「STUDIO302」の様子 (撮影 | 加藤 甫)



「STUDIO302」の施工風景

る対象の枠を広げ、接続する方法を常に探し出す習慣が重要になると考えています。

樹の切り株に新芽が生える「ひこばえ」のように、あるとき切り取った事象から思いもしない可能性がひらくかもしれない。そういう視点で人や物の動きを見ると、点ではなく面、そして一つの生態系として世界が見えてくるのではないのでしょうか。

また、2020年7月に初心者でも映像収録・配信ができる「STUDIO302」を開設しましたが、これはコロナ禍の要請に応えることだけが目的ではありません。これまで東京アートポイント計画ではさまざまな形式のイベントを実施したり、本などのメディアをつくってきましたが、それと同じように、これからは選択肢の一つとしてオンライン配信に関する知識と経験も必要だと考えました。どのような技術をもった人が何人くらい必要で、どういったプロセスでつくれるのか。それを知るためにまずは自分たちがやって

事業予算

東京都の年間文化振興予算は、165億9400万円です。そのうち公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織であるアートカウンシル東京は、35億3600万円。わたしたちは、3事業を合わせて、年間「1億9500万円」（外部予算を含む）の予算規模で動いています（令和2年度）。予算時点での概算にて、事業予算についてご紹介します。

東京アートポイント計画

1億1500万円

〔財団予算8100万円+外部予算* 3400万円〕

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

4700万円

〔財団予算4600万円+外部予算100万円〕

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

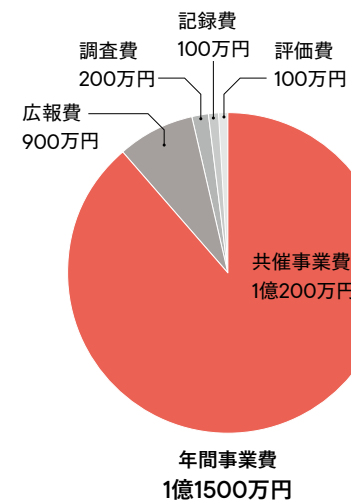
3300万円

* 基礎自治体負担金、助成金、事業収入等。 ** 金額はすべて「約」です。

東京アートポイント計画では、共催団体と協議し、毎年予算計画を立てています。どのくらいの規模であれば、無理なく運営ができるのか。事務局を担うNPOの体力や伸びしろを見極め、予算を調整。2年目以降の事業は増額してマネジメント力を鍛えたり、あえて減額して活動の質を高めたりするなど、常に事業の適正規模を探っています。

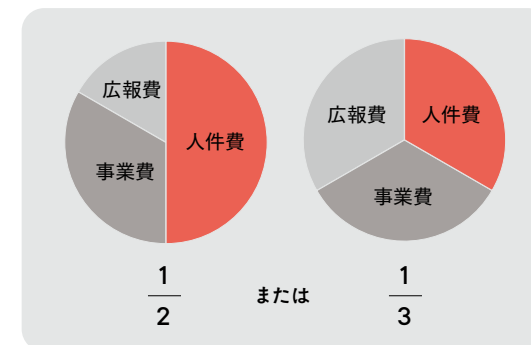
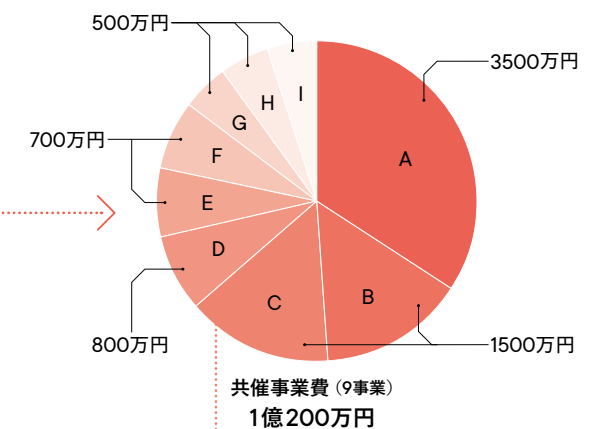
〔東京アートポイント計画の年間事業予算内訳〕

事業予算の大部分は、「共催事業費」です。そのほかに共催団体を含むすべての活動の「広報費」、出張や書籍購入などに使う「調査費」、事業の「記録費」「評価費」があります。



〔各共催団体の年間事業予算内訳〕

四つの共催期間「立ち上げ・育成（1～3年）」「連携・支援（4～6年）」「パートナー（7～10年）」「フォローアップ」や事業の目的、特徴に合わせて、適正規模を協議。立ち上げは300万円からスタートすることが多く、それ以降は外部予算の状況により1000万円以上になることもあります。



割合

〔共催団体における予算の割合例〕

アートプロジェクトでは、企画制作費に対する助成がほとんどで、人件費も含めた支援はまだ国内では多くありません。東京アートポイント計画では、持続可能な活動を行うために、共催団体の「人件費」を全体予算の1/2または1/3の割合になるように設計しています。



「TURNフェス5」（2019年）にて、ろう者と視覚障害者がナビゲートするツアーの様子（撮影 | 加藤 甫）

みる。POが新しい技術やツールを学ぶ機会でもありました。

社会の在り方を更新する

—— 2021年は、どのようなことに取り組む予定ですか？

東京アートポイント計画の運営母体である公益財団法人東京都歴史文化財団として、誰もが、いつでも、どこでも芸術文化を楽しめる環境をつくる「クリエイティブ・ウェル・プロジェクト（CWP）」を本格的に開始します。近年、海外の美術館では「アクセス・プログラム」が整えられています。この「アクセス」とは、美術館に来るまでと、来たあとの体験の両方にかかわるもの。例えば、健常者向けの音声ガイドでは、視覚障害者には不十分です。CWPは、そうした課題に必要なアプローチを実装していくプロジェクトです。

自分は東京オリンピック・パラリンピックのリーディングプロジェクト「TURN」のディレクターも務めているのですが、CWPはそこでの経験が生きています。TURNとは、福祉施設とアーティストの交流を通じ、個人の間さまざまな「違い」を表現につなげるプロジェクトです。そこで障害者や高齢者、日本語を

母語としない外国人などと出会い、障害者に健常者と同じ体験を与えるような「支援」ではなく、むしろその人たちの当たり前から新しい物事の見方を学び、「協働」の視点を教えてもらいました。

こうした当事者と協働するインクルーシブな手法をもつことで、文化事業の質はまったく異なってくると思います。そして、これはコロナ禍だからこそ、実感をもって向き合える社会の要請でもあります。例えば従来は、車椅子の人が参加する席には広い空間が必要とされていた。しかし、いまでは誰もが密にならないスペースが必要ですね。

コロナ禍は、いままで社会的に不自由を強いられてきた人たちの日常から学ぶチャンスであり、社会の在り方を更新できる好機。誰も正解がわからないからこそ、イノベーションを得意とする文化事業者が、社会を更新する役割を担うべきだと思っています。

大胆に「学ぶ」ときの気づきのヒントとなるものは思わぬところにあると思っています。さまざまな価値観が急速に変わりつつある「ルールブック」改定時代に対応した事業のかたちを、失敗を恐れずチャレンジして、提示し続けていきたいですね。

1 東京アートポイント計画

<https://tokyoartpoint.jp>

▶ TERATOTERA

共催 一般社団法人Ongoing
(2013年に一般社団法人TERATOTERAから名称変更)**場所** JR高円寺駅-国分寺駅エリア**URL** <http://teratotera.jp>

古くから多くのアーティストや作家が暮らし、若者の住みたいまちとして不動の人気を誇るJR中央線高円寺駅から国分寺駅区間を舞台にしたプロジェクト。2010年、Art Center Ongoing 代表の小川希を中心に始動し、現在進行形のアートを発信している。また、ボランティアスタッフ「テラッコ」による企画・運営を通じて、アートプロジェクトの人材育成にも取り組んでいる。毎年、社会に応答したテーマを掲げ、まちなかで開催する展覧会「TERATOTERA祭り」はテラッコの実践の場であり、毎回ドキュメントブックを発行している。

2020年のTERATOTERA祭りは、「Collective ～共生の次代～」をテーマに、東南アジアと日本から6組のアート・コレクティブを東京に招聘する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、オンラインにて開催。この状況下でそれぞれのコレクティブがどのように過ごし、何を考え、どのような作品を発表するか、その話し合いの様子をYouTubeで公開し、作品ができるまでのプロセスの情報発信にも力を入れた。

また、テラッコの歴代メンバー16名によって設立されたアート活動を支える組織「Teracollective (テラッコレクティブ)」は、2020年に一般社団法人化し、新たな文化事業の担い手として期待される。

▶ 小金井
アートフル・アクション!**共催** 2011年：小金井アートフル・アクション!実行委員会/
2012年～：特定非営利活動法人アートフル・アクション、
小金井市**場所** 小金井市内各所**URL** <http://artfullaction.net>

まちの人がアートと出会うことによって日常生活のなかで新たな発見をし、自らの潜在能力に可能性を見出すこと。そして、それがこころ豊かな生き方を追求するきっかけとなることを目指すプロジェクト。芸術文化によるまちづくりや、市民がかかわる場づくりを行っている(小金井市芸術文化振興計画推進事業)。

2020年は、高齢者が映像制作を行う「映像メモリーちゃんぼんくらぶ(通称:えいちゃんくらぶ)」、アーティストとまちなかでの表現を行う「まちはみんなのミュージアム」、海外にルーツをもつ人や文化的背景が異なる人と文通や交換ノートを行い、関係づくりを試みる「pen友プロジェクト」、市内外の小学校との「学校連携事業」の四つを軸に展開した。

小金井アートフル・アクション!では企画・制作から市民と協働することを大切に、事務局だけではなく、新たな担い手づくりに注力して進めてきた。「えいちゃんくらぶ」「まちはみんなのミュージアム」「pen友プロジェクト」では、こどもや高齢者、海外ルーツの方々など、さまざまな世代を対象にしたことで、より幅広い人たちとのかかわりが生まれている。各プログラムの成果や気づきを共有する場として、参加しているメンバーが主体的にかかわり、一人ひとりが自分の表現を行う展覧会を開催した。

▶ アートアクセスあだち
音まち千住の縁**共催** 2011～2013年：東京藝術大学音楽部、特定非営利活動法人やるネ、足立区/2014～2015年：東京藝術大学音楽部、特定非営利活動法人音まち計画、足立区/2016年～：東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区**場所** 足立区内各所**URL** <https://aaa-senju.com>

人とのつながりが希薄化しているなかで、アートを通じた新たなコミュニケーション(縁)を生み出すことを目指すアートプロジェクト。昔ながらの宿場町の雰囲気が残る足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して“音”をテーマとしたプログラムをまちなかでやっている。2012年の足立区制80周年記念事業をきっかけに誕生した。

シャボン玉でまちの風景を変える大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」や野村誠「千住だじゃれ音楽祭」、日本に暮らす海外ルーツの人々の文化を知る「イミグレーション・ミュージアム・東京」、暮らしのなかの記憶や風景を素材とした音楽をまちなかで表現するアサダワタル「千住タウンレーベル」など、多様な“縁”を紡ぐ試みを行っている。2018年より、千住仲町にある日本家屋「仲町の家」を地域の文化サロンとしてひらいている。

2020年は、オリンピック開催を見越して予定されていた大規模な企画が相次いで延期・中止に。しかし、アーティストや市民メンバーと日常的に実験や議論を重ね、オンライン対応を行ったり(「メロリア学校の昼やすみ」「イミグレーション・ミュージアム・東京」のオンライン美術館ほか)、プログラムの方針転換を行ったりするなど(「千住の1010人 from 2020年」、アサダワタル「緊急アンケート《コロナ禍における想像力調査 声の質問19》」ほか)、あらためて活動の意義を見直し、これまでの蓄積を生かしながら柔軟に対応した。

また、仲町の家は、メディアに取り上げられることも多く、そのお陰で新しく訪れる人が増加。オンライン企画のサテライト会場としても使用し、プロジェクトへの入り口としての役割が生まれている。

▶ 500年のcommonを
考えるプロジェクト「YATO」**共催** 社会福祉法人東香会**場所** 町田市忠生地域**URL** <https://yato500.net>

「谷戸」と呼ばれる、丘陵地が侵食されて形成された谷状の地形をもつ町田市忠生地域。「すべて、こども中心」を理念とする『しぜんの国保育園』や寺院を取り巻く里山一帯を舞台に、地域についてリサーチしながら、500年後に続く人と場の在り方(=common)の仕組みを考えるアートプロジェクト。アーティストや音楽家、環境や歴史などの専門家や地域の団体と連携し、こどもと大人と一緒に取り組める企画を行っている。

2020年は、刻々と変化する社会状況に応答しながら、オンラインとオフラインの企画にそれぞれ取り組んできた。毎年秋に開催している「YATOの縁日」では、メンバーで検討を重ね、早い段階でオンライン配信を決定。縁日で披露する影絵芝居の人形は、アーティストとこどもたちが郵送で材料や作品をやりとりし、遠隔で影絵人形の制作ワークショップを行った。地域の小学生が年長者やアーティストと出会う「やとっ子同盟」では、「しずむおと(土の楽器で演奏しよう)」などをオンライン開催し、「YATOのちいさな遠足～山野草を探して～」はオフラインで行った。プロジェクトメンバーがラジオ風に一年を振り返る「YATOの年の瀬」ではInstagramにてライブ配信を行うなど、配信方法の工夫も重ねてきた。

そのほかにも、地域のこどもたちに向けて^{ただお}忠生地域のかつての姿を伝える『YATOかわら版』の発行や、その土地で暮らす個人の視点を通して、地域の物語や風土に触れることができるアーカイブプロジェクトがスタートした。

▶ HAPPY TURN / 神津島

共催 特定非営利活動法人神津島盛り上げ隊

場所 神津島村

URL <http://happyturn-kozu.tokyo>



独特な神話と歴史をもち、豊かな自然が残る伊豆諸島の一つ、神津島で、人々が島に愛着をもち、当事者としてかかわる土壌を育むことを目指すプロジェクト。もともと住んでいた人だけでなく、移住者や島を離れて暮らす人などさまざまな立場の人に向けて、島の歴史や文化を学び合う場づくりを行っている。

2020年は、こどもを中心に自然と人々が集まるようになった拠点「くると」の庭に着想を得た「島の庭びらきプロジェクト」や、新型コロナウイルス感染拡大の影響で往来が困難ななか、島を出た人から島に住む人へのメッセージを届ける「やーい！～島をつなぐビデオレター～」が生まれた（「やーい！」は、人を呼ぶときやあいさつに使われる島の言葉）。島独自の風習をリサーチやワークショップの手法で伝える「コウツのコウズ」なども実施。毎週末にオープンしている拠点では、自習室「MANABU」をひらいた。中高生が宿題やテスト勉強をするだけでなく、社会人も学びを通して交流している。

また、島での暮らしや経験をきっかけに、自らの暮らしをよりよくしようとする人々の物語を共有するメディア『HAPPY TURN / 神津島通信』や、村の回覧板で全世帯に配布する『くるとのおしらせ』（月回）をつくるなど、島内外をつなぐ情報発信を行った。

▶ Artist Collective Fuchu [ACF]

共催 特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ

場所 府中市

URL <https://acf-tokyo.com>



郊外にある住宅地・府中市では、子育てや生業を通して、暮らしのなかでのアートそれぞれの立場から考えている人々が集まっている。そうしたメンバーのネットワークを軸に、あらゆる表現を通じて「アーティストにとって住みよいまち」、自由に活発な「誰もが表現できるまち」を目指すプロジェクトを行っている。

2020年は、メンバー体制を一新し、拠点づくりについての議論を行った。ロジックモデルの制作、他団体へのヒアリング、小冊子の編集など、長期的な活動の構想と言語化に取り組んだ。

昨年から続く、人と人、人と場所、人とコトのネットワークを広げていくプログラム「null—自由な場所とアートなこと—」はオンラインにて開催。ラジオフチュウ87.4MHzで放送している番組「Artist Collective Fuchu presents『おとのふね』」では、新型コロナウイルスの感染症対策を講じながら月1回の放送を重ねた。

また、ウェブサイトのリニューアル、かわら版発行など、まちなかの人々とのコミュニケーションに注力した。

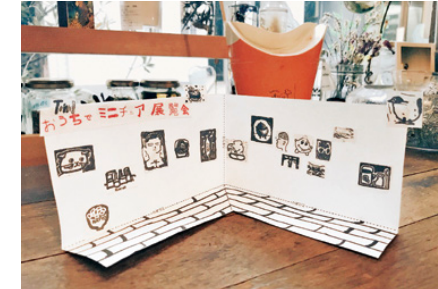
▶ ファンタジア! ファンタジア!

—生き方がかたちになったまち—

共催 一般社団法人うれしい予感

場所 墨田区内各所

URL <http://fantasiafantasia.jp>



「墨東エリア」と呼ばれる墨田区北部は、2000年代初頭の住民主導のアートプロジェクトをきっかけに、現在も多くのアーティストが暮らす地域。この地域を舞台に、地域の人々とアーティストや研究者との対話を通し、豊かに暮らすための創造力や文化資源の価値についてやわらかな観点で考え、「学びの場」をつくっている。「学びの場」とは、これまでの「当たり前」を解きほぐす対話が生まれるような場であり、他者との対話によって新たな気づきを得る体験を通して、絶えず自分自身の想像の限界を更新することを「学び」と捉えている。

2020年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、変化する「日常」や「生活」にどのように応答するかを考えるとところからはじめた。定期的に発行してきた広報紙『ファンファンター』に組み立て式の付録をつけ、近隣飲食店のテイクアウトと連動させたり、人に話をきく「WANDERING」のオンライン版を制作したりするなど、「みじかい間、少し遠くまでの対話」を実施。また、事務局内でラジオ番組風に情報共有をする「ラジオの時間」を設けるなど、柔軟に状況に向き合いながら活動を行った。

また、そのなかで生まれたキーワードをもとに、「暮らしの中の創造力」についてゲストと語る「ラーニング・ラボ」や、アーティスト集団・オル太とのプラクティス「超衆芸術スタンドプレー 夜明けから夜明けまで」、プロジェクトを支える活動「ファンファン倶楽部」のメンバー募集などを行った。

▶ 東京で(国)境をこえる

共催 一般社団法人shelf

場所 世田谷区ほか

URL <https://www.tokyokokkyo.tokyo>



多くの在留外国人や海外にルーツをもつ人々が生活する東京。「東京には見えないことにされているさまざまな壁がある」という仮説をもとに、その「見えない(国)境、壁」について考えるプロジェクト。東京に生きる人々、特に外国にルーツをもつ人々が感じている「個人と他者/社会/世界との境界」と、それにまつわる問題を探りながら、日常的に出会いが生まれる場づくりを目指す。

2020年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響でプログラムの再設計を余儀なくされたが、コラボレーター（専門知識のあるボランティア）とオンラインで定例会を開き、昨年からの準備をしていた「kyodo 20_30」を再設計した。「kyodo 20_30」は、10年後の2030年に社会を担う20歳から30歳と行うアートプロジェクト。国籍・言語・文化などにとらわれずにさまざまなクリエイションを行い、他者や社会への理解を深めるプロセスを重ねている。新たに加わったメンバーを含め、総勢25名ほどの参加者で、毎回ゆるやかかつ白熱したディスカッションやフィールドワークが行われている。読書会や動画リレー、個別インタビューなど、メンバーによる多数のスピノフの活動も生まれた。

また、ウェブサイトの公開のほか、YouTubeチャンネルを開設し、説明会をライブ配信。noteではディレクターズメッセージを発信し、Facebookでは毎回の活動の様子をレポートするなど、積極的に情報発信を行った。

▶ 移動する中心 | GAYA

共催 特定非営利活動法人記録とメディアと表現のための組織 [remo]、公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

場所 世田谷区ほか

URL <https://aha.ne.jp/project/gaya>



2015年から世田谷区内で収集し、デジタル化してきた16時間分のホームムービーを生活文化資料として活用し、語りの場をつくるコミュニティ・アーカイブプロジェクト。昭和の世田谷の暮らしやまち並みが、市井の人々の視点から記録されていた8ミリフィルム。その映像再生をきっかけに紡がれた個々の語りを拾い上げ、プロジェクトをともに動かす担い手づくりを目指す。

2019年から、オーラル・ヒストリーを集める「サンデー・インタビューーズ」のメンバー募集を開始。「昭和」という時代に向き合いながら、わたしたちがどのような時代に生きているのか、誰かの記録を借りて「わたし」の視点を獲得することを試みている。2020年は、オンラインでメンバーとともに8ミリフィルムの映像鑑賞を定期的に行った。一つひとつの映像を細かな場面に区切り、議論を行った様子をnoteに公開。多角的な視点で語り合うために、映像に現れた風景や職業などにまつわりサーチや対話を重ねた。

これらの活動を通して、映像を鑑賞し、語りを収集する三つのステップ（みる、はなす、まぐ）を整理。このステップをまとめたプロジェクトサイトをつくり、新しいメンバーとの出会いやまちなかでの展開の構想を練っている。

東京アートポイント計画

秋の祭りもオンライン。世界中から来てください。
メルニュース「Artpoint Letter」の2020年8月号をお届けします。



10年目のTERATOTERA祭り、今年はオンラインで開催！

インドネシア、タイ、カンボジア、北極、京都、東京、東南アジアと日本のアートコレクティブ
6個のアーティスト、パフォーマンス、演劇などの作品をライブ配信などでお届けします。テーマ
は「Collective - 共生の次代」。オンラインでの開催も検討中です。詳しくはこちら

毎月1回、メールニュースをお届けしています。

アートプロジェクトの現場の最新情報はもちろん、その舞台裏やプログラムオフィサーによる読み物などを「Artpoint Letter」としてお届けしています。希望される方は、こちらからご登録ください。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/blog/20507>



2 Tokyo Art Research Lab (TARL)

<https://tarl.jp>



アートプロジェクトを実践する人々とともにつくり上げる学びのプログラム。アートプロジェクトの担い手を育てる「思考と技術と対話の学校」と、新たなスキルやシステムをつくる「研究・開発」の二軸で、東京アートポイント計画の現場での課題を拾い上げ、来たるべき社会に向けたリサーチを行っている。

「思考と技術と対話の学校」では、「レクチャー」「ディスカッション」「東京プロジェクトスタディ」の3プログラムを実施。東京で“何か”をつくるとしたらという問いかけに対してスタディ（勉強、調査、研究、試作）を行う「東京プロジェクトスタディ」では、3チームがスタート。ろう者やダンサーなど身体性の異なる他者や、移民や難民など異なるルーツをもつ人との関係を模索するなど、新しい出会い方を探る一年となった。

「研究・開発」では、オンライン中継のプログラムや、プロジェクトをアーカイブするための基礎を学ぶ映像コンテンツの制作など、コロナ禍での需要の高まりに応答した。

また、東京アートポイント計画の共催団体勉強会「ジムジム会」や、文化事業にかかわるTARL卒業生の全国ネットワーク「つどつど会」をひらき、それぞれの悩みやアイデアを共有する横のつながりを育んだ。

3 Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT)

<http://asttr.jp>



2011年7月、東京都の『東京緊急対策2011』をきっかけにはじまった東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業。東日本大震災の被災地域（岩手・宮城・福島県）のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを行っている。東京アートポイント計画の手法と同じく、既存のプログラムをもち込むのではなく、NPOやコーディネーターと対話を重ね、震災の経験や土地の記憶の継承、集いの場づくりなど地域の多様な文化環境を支援。そこで暮らす人たちのこころやコミュニティを再興するために、交流プロセスを重視したプログラムや、それを支える仕組みづくりを行っている。

2020年は、東日本大震災から10年目。これまでのように被災地域へ足を運ぶことが難しいなか、オンラインのできる活動にシフトし、3県で4プロジェクトを行った。

また、ウェブサイト『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』をリニューアルし、東日本大震災の経験を未来につなげるメディアを立ち上げた。“忘れられない” “忘れたくない” 出来事を綴った「10年目の手記」、震災後に生まれた知恵や技術が“声”となって交差する「10年目をまぐラジオ モノノク」(月2回)、震災の経験とコロナ禍をつなぐ「2020年リレー日記」など、これまで東北にこころを寄せてきた人たちと一緒にこの10年を振り返った。

Artpoint Reports

2020 → 2021

編集 | 川村庸子

執筆 | 佐藤恵美、杉原環樹、木村和博

アートディレクション&デザイン | 北岡誠吾

協力 | 中田一会 (きてん企画室)

印刷 | 株式会社歩プロセス

プログラムオフィサー | 大内伸輔・岡野恵未子 (アーツカウンシル東京)

監修 | 森 司 (アーツカウンシル東京)

発行 | 2021年3月25日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

ISBN978-4-909894-22-9 C0070



ARTS COUNCIL



ARTS

